
彼氏に嘘をついた彼女と
妻に嘘をついた俺
2つの裏切り

# 二つの裏切り——彼氏に嘘をついた彼女と、妻に嘘をついた俺

目次

第一章　食卓の向こう
第二章　見てくれない絵
第三章　ちゃんと見て
第四章　重なり合う二人
第五章　着信——目覚める欲望

第六章　二度目の夜

※この体験版には、第一章・第二章を収録しています。

# 第一章　食卓の向こう

妻の作った夕食は、今日も三人分だった。

金曜の夜七時。

ダイニングの明かりの下で、妻と、十九歳の娘と、三人で食卓を囲む。

妻は近所の奥さんの噂話を続け、娘は片手でスマホを眺めながら箸を動かしている。

俺が口を挟む隙間はなかったし、正直、挟もうとも思わなかった。

四十四歳。

結婚して二十年になる。

寝室のベッドでは、妻はいつも壁の方を向いて眠る。

最後に妻を求めたのはいつのことだったか。

拒まれるのに疲れて、求めること自体をやめた。

夫婦というより、同居人という言葉の方が今の俺たちには似合っていた。

アプリを入れたのは、その週の日曜だった。

発端は、大学時代の友人だ。

そいつは二年前に離婚してから身軽になった男で、先月の同窓会の二次会で、酔った顔でスマホの画面を見せてきた。

「お前も登録してみろ。会わなくてもいいんだ。若い女の子と他愛ない話をするだけで、なんか、男に戻れる気がするぞ」

笑い飛ばしたはずだった。

なのに日曜の昼下がり、妻が買い物に出て、娘も友達と出かけた静かなリビングで、俺は一人、アプリをインストールしていた。

プロフィールには嘘を書かなかった。

四十四歳。

既婚。

会うなら秘密厳守で。

それで相手が見つかるはずがない、と半分安心していた。

彼女の写真を見つけたのは、登録した夜のことだった。

川沿いのベンチに座って、缶コーヒーを両手で持って笑っている写真。

作り笑いじゃない、少し照れたような笑い方だった。


COFFE

二十一歳。

大学三年生。

プロフィール文は短かった。

「かまってくれない人の代わりを探しています。秘密を守れる人だけ、よろしくお願いします」

いいねを押す指が、一瞬止まった。

十九の娘と、二つしか違わない。

それぞれが俺以外の画面を閉じるためだけにあなたを先にただのか、向こうも押していたのか分からない。

先にメッセージを送ってきたのは彼女だった。

『こんばんは。既婚の方なんですね』『そう。最初に言っておく』

『私は、それでも大丈夫です。私も、彼氏がいますから』

隠し事がない代わりに、重さもなかった。

その後三日間、他愛ないやり取りが続いた。

大学の授業のこと。

バイト先の愚痴。

彼氏のことは、彼女は自分から少しだけ話した。

一つ年上の先輩で、就職が決まって、卒論とバイトで毎日忙しく、最近は会えば寝てしまうような人だ、と。

『私の話を聞いてくれるの、最近このアプリの中だけです』

その一文に、俺は長く見つめてしまった。

会う話を持ち出したのは俺だった。

来週の金曜、大学の近くの喫茶店で、一時間だけ。

彼女の返事は早かった。

『分かりました。その代わり、約束してください』

『なにを』

『名前も、それ以外のことも、聞かないこと。終わったら、連絡先は消すこと。一回だけにしましょう』

『……分かった』

約束は決まった。

その夜の食卓で、俺は妻に言った。

「来週の金曜、支社の監査が入ってな。泊まりになるかもしれない」

「はいはい。スーツの替えだけ出しといてあげる」

妻は味噌汁をよそいながら、それだけ言った。

疑うでもなく、心配するでもなく。

事務連絡に頷くような声だった。

――これでいいはずだった。

一回だけ、誰にも何も残さない夜になるはずだった。

# 第二章　見てくれない絵

待ち合わせの三十分前に、俺は大学の正門前に着いていた。

早く着きすぎた男の惨めさは、学生たちの視線でよく分かった。

四十四にもなってジャケットなんか着て、正門の脇で所在なく立っている。

通り過ぎる学生が、ちらりと俺を見る。

娘がこの春に卒業した大学ではないのに、その視線の全部が「誰かの父親が、迎えに来ている」に見えた。

何度も帰ろうと思った。

駅に戻る道は分かっている。

今ならまだ、ただの散歩で済む。

そのたびに、川沿いのベンチの写真が頭に浮かんだ。

両手で缶コーヒーを持って、少し照れて笑う顔。

あの笑顔に、もう嘘をつきたくなかった。

「すみません、待たせてしまって」

息を切らして、彼女が来た。

写真より少し痩せて見えた。

クリーム色のニットに、長いスカート。

大きなトートバッグを肩にかけ、俺の前に立つと、一度深く頭を下げた。

「はじめまして。今日は……来てくださって、ありがとうございます」「ああ」

たった一言が、情けなく乾いていた。

大学近くの喫茶店まで、彼女は半歩後ろを歩いた。

俺と並ぶのが、まだ怖いのだろうと思った。

店は放課後の学生で賑わっていた。

奥のボックス席に通され、彼女は長いことメニューを見ていた。

迷っているのではない。

何かを言うまでの時間を、メニューで稼いでいる顔だった。

「……メロンクリームソーダで」「子供っぽいですか」と、彼女は自嘲気味に笑った。

「彼氏に、前はよく笑われたんです。二十一歳にもなって、って。でも今日は、好きなものを頼みたくて」

俺はコーヒーを頼んだ。

出てくるまでの沈黙が長かった。

彼女はトートバッグの持ち手を、指で何度も撫でていた。

中から、使い込んで角の潰れたスケッチブックが見えた。

「絵を描くのか」「はい。趣味ですけど」

言いかけて、彼女は少しだけバッグを開いた。

「見ますか。……大したものじゃないんですけど」

差し出されたスケッチブックには、猫の絵が何ページもあった。

窓辺で眠る猫、伸びをする猫。

そして最後のページに、窓の外を見る少女の後ろ姿があった。

光の描き方が、素人の趣味の域を超えていた。

「この窓の光、うまいな。本物の午後みたいだ」「……」

彼女の手が止まった。

次の瞬間、目にみるみる涙が溜まった。

「ちゃんと見てくれたの、久しぶりです」

ああ、と俺は思った。

この子は、絵の感想が欲しかったのではない。

見てもらうということが、どれだけなかったのか。

二年付き合った彼氏は、最初は一枚ごとに感想をくれたという。

就職が決まり、卒論が始まってから、返事は「ふーん」になり、「あとで見る」になり、やがて絵を送ること自体、彼女のほうでやめた。

記念日も忘れられた。

手も、何か月もつないでいない。

「悪気がないのは、分かるんです。忙しいのは本当ですし。でも、隣にいるのに、私だけいないみたいで。……私、消えていってる気がするんです」

俺はコーヒーを飲んだ。苦さだけが、妙に正直だった。

妻の顔が浮かんだ。

俺もまた、家庭の中で誰かを見ないで過ごしてきたのかもしれない。

求められない孤独と、見てもらえない孤独は、食卓の向こうとこちらで、同じ形をしていた。



やがて彼女は、グラスの底に沈んだメロンの果肉を見つめたまま言った。

「今日、ここで帰ったら、私はまた一人で部屋に帰って、誰にも見てもらえない絵を描いて、それがずっと続くんだと思います」

声が震えた。

それでも彼女は顔を上げた。

「私、まだ……女として、見えますか」

二十一歳。

娘と、二つしか違わない。

そんな相手に、既婚の四十四が何を答えられる。

答えられるのは、正直さだけだった。

「……見える。見えすぎるくらいだ」

彼女の頬に、涙が一筋流れた。

それを拭うと、彼女は小さく息を吸った。

「なら、今夜だけは……私を一人にしないでください。お願いです」

店を出たとき、夕方の光はビルの影に沈みかけていた。

商店街のアーケードを抜ける間、彼女の歩幅はずっと小さかった。

交差点で信号を待つとき、不安そうな指先が、俺のジャケットの袖をつまんだ。

ほんの少しの重さだった。

それが、この子の精一杯なのだと思った。

俺はその手を、振り払わなかった。

駅の裏手に回ると、古いラブホテルの看板が見えた。

派手な色の明かりの下で、彼女の足が止まった。

袖をつまむ指に力が入り、震えが俺の腕にまで伝わった。

「やめても、いいんだぞ」「……いいえ。私が決めたことですから」

そう言って彼女は、俺より半歩先に、明かりの下へ歩いた。


HOTEL
休憩
3,000円
(2時間)
宿泊
8,000円

## 体験版はここまでです

この先、本編では、

第三章「ちゃんと見て」。

古いラブホテルの一室で、

普通の白い綿の下着のまま震える彼女と、

初めての夜が始まります。

第四章「重なり合う二人」。

彼氏に満たされたことのなかった彼女の体が、

少しずつ変わっていきます。

第五章「着信――目覚める欲望」。

彼氏への嘘の返信が引き金になり、

気弱だった男の独占欲が目覚めます。

第六章「二度目の夜」。

三週間後、彼女のほうから二度目の連絡が来て、

物語は一夜では終わりません。

本編は全六章、約一万七千八百七十四字、

挿絵九点収録の完結編です。